むかし「局アナ」いま「隠居」

滑舌（かつぜつ）

上田 博章（絵・文）
1933年徳島市生まれ 大阪府在住
■京都大学農学部林学科卒業
■元朝日放送アナウンサー
■元池田マルチメディア代表取締役
■講演、朗読指導など以外は隠居中

50年もの間、通勤は勿論、何処かへ行くときは、必ず阪急電車のお世話になっています。

或る日、電車の中で突然怒声や、女性の金切り声が聞こえてきてビックリしたことがありました。

暴力団の喧嘩か 女性が襲われたのかと思ったら、若い乗務員が あらん限りの大声を張り上げて、

「○○ よしッ !!」

「出発 進行ッ !!」

運転士や車掌の新人が、先輩の指導員に命じられ「喚呼」をマニュアル通りに…それも恥ずかしいほどの大声で、叫んでいたのです。

近ごろ阪急電鉄は女性の運転士や車掌を乗務させていますので若い娘の絶叫も車内に響いていました。

私は心の中で呟くのです。

「ビックリするがな。…けど、大声は最初だけやろな」

＊

電車の乗務員は、乗客の命を預かる重要な仕事です。「喚呼」を恥ずかしがったり照れたりせず 明確に 発音しなければなりません。

だからといって、あんなバカでかい声で叫ぶ必要が、どこにあるのでしょうか。

新人教育が終わったあと、ずーっと大声で叫ぶ乗務員など一人もいない…そんな現実は、指導する側も充分ご承知のはずです。

なのに大声や金切り声を要求するのは、新入社員に「活」を入れ、恥ずかしさや照れ臭さを払拭（ふっしょく）するための伝統行事だとは思いますが、喚呼訓練で発する大音声（だいおんじょう）は、客をビックリさせる「騒音」だと 私は思うのですが…。

＊

実は よく似た伝統が、「アナウンサー業界」にもあったのです。

「口を正しく忠実に動かすことによって発声の基礎が築かれるのである」

昭和 初期から、NHKの先達（せんだつ）アナウンサーが唱えてきた基本理念です。

これは多分、ラジオしかなかった時代に確立された「局アナ教育」の伝統ではなかったでしょうか。

テレビだったら、言葉が多少 解り辛くても、映像や字幕が助けてくれますが、ラジオではアナウンサーの喋った言葉を、それも一回聞いただけで解ってもらう必要があります。

耳の遠い人でも、騒音の中で聴いている人でも解るアナウンスが肝要で、魅力、テンポ、迫力などは 二の次三の次でした。

当時は、ラジオ受信機の性能が悪く、とくに音質が良くなかったので、

「多少、口を歪（ゆが）めようが、眼を剥こうが、ゆっくり、はっきり喋りなさい」

と 言われていたのかもしれません。

私が局アナになったのは、一九五〇年代でしたから、ベテランのアナウンサーは皆さん ラジオで活躍していた人が多かったからか、癖のあるけったいな動きをする人がいたのです。

いつもは普通に喋るのにマイクの前だと、口を捏（こ）ねまわさないと喋れない人。

文章の切れ目ごとに顎をグイッと、しゃくる人。

舌なめずりを頻繁に繰り返す人。

ニュースを読むとき必ず首をかしげる人。

小学校で国語の教科書を読むときのように、原稿を立てる癖のある人。

…ラジオだと何ら問題ない動きですが…、そんな人はテレビ時代に入って神経を使っていました。

そもそも「局アナ」なんて所詮はサラリーマンです。

入社すると、先ず同期のお仲間と一緒に社員教育を受けるのですが、局アナは、更なる訓練を受けなければならない…、列車やバスの乗務員と同じでした。

ですから、新しく入ったアナウンサーが、テレビやラジオでデビューするのは五月か六月になるのです。

訓練を受けた新人アナが、初めて声を発することを、業界では「初鳴き」と言っていました。

この「初鳴き」の佳き日、スタジオの中に先輩アナが後見人として入ります。

「儂が居るから安心せえ」

と言わんばかりですが、人によっては安心どころか却って緊張してしまうかも知れませんけど。

「初鳴き」の季節になると、あちこちの放送局で、妙な鳴き方をする新人がテレビ画面に現れます。

唇を捏ね回し顔面神経を総動員してニュースを読む新人アナを見たことがあるでしょう？

私は心の中で呟くのです。

「そないせんと、日本語が喋れんのか ヘタクソ」

NHKのアナウンサーで、大阪勤務のころ親しかったWさんが、高校生を相手に発音を教えるテレビ番組で、こう言っていました。

「いいですか アイウエオの「ア」は指が2本入るくらい口を開けるんですよ」

…と言いながら、指を2本咥えて見せたと思ったら、今度はヒョットコよろしく口を尖がらせました。

「これが「ウ」の口構えです」

と指導していたのです。

ここで、ちょっと考えてみて下さい。

貴方が普段 喋っていて、「ウ」や「オ」が出てきたとき、ヒョットコみたいに口許を尖らせたりしますか？

また日常会話の中で「ア」という音を発するとき指が縦に2本も入るほど大口を開けたりしますか？

日本語はそんなご大層な口構えをしないでも話せる滑らかな言語なのです。

新人アナの訓練も、近頃かなり改善されていますが以前は、何処の放送局でも日常語と懸け離れた滑舌を押しつけていました。

「初鳴き」の新人が口を捏ね回すのはその後遺症です。

しかし、これは一時的な症状で、一人前の局アナになれば普通に戻りました。

…阪急の運転士や車掌さんと全く同じ現象です。

若いころ上司に対して、

「どうせ元に戻るんだから妙な滑舌指導は不要です」

なんて文句を言ったものですが、伝統とはなかなか破れないもので 結局、

「上田は何でも反対しよる」

と先輩諸氏の反感を買うばかりでした。

＊

入社して何十年か経つと、誰しも古株になってきます。

「何でも反対」の上田にも採用試験の審査とか、新人教育といったお役が回ってくるようになりました。

局アナの入社試験では、書類選考からマイクテスト、カメラテスト、筆記試験、面接など、幾重にも関門を設けていますので、顔面を引き攣らせ、唇を歪めたりしないで、スンナリ喋れる学生を採用すればよろしい。

多くの私大には放送部やアナウンス研究会があって、すでに局アナになっている先輩が 足を運んで、指導に当たっていました。

ですから、そこで訓練を受けた学生が、入社試験で優位に立つのは当然です。

そういう学生を、即戦力として採るかリスク承知で潜在能力に賭けてみるか…、採用側は迷うのでした。

＊

「かつぜつ」の漢字は「滑舌」、「活舌」… どちらでもいいのだそうです。

「滑舌」は 元々、業界用語で、私が入社早々教科書として使用した一九五六年発行の**「NHKアナウンス読本」**では「早口言葉」「口の運動」というのは出ていましたが、「滑舌」という言葉は入っていませんでした。

ところが、それから 40年ほど経過した一九七八年、**「ABCアナウンス読本」**と銘打った朝日放送自前の教科書を作り、新人アナの教育に使ってきました。

この教科書には「滑舌」という言葉が出ています。

しかし「ABC読本」は朝日放送が「内向け」に出版したもので公の刊行物とは違いますから、これだけで「活舌の由来」を云々するのは無理でしょう。

電子辞書や新しい辞書で「かつぜつ」を引いても、ワードで叩いても「滑舌」が出て来ますが、我家にある一九九三年の**「広辞苑」**には、「活舌」なんて出ていません。

手許にある一九九八年版**「NHKアクセント辞典」**で引いても、「活舌」は載っていませんでした。

どうやら、「滑舌」という言葉は、思いのほか 新しい業界用語だったようです。

「口の運動」よりは「滑舌」の方が使い勝手が良いからか、いまや、日本中で使われる日常語となりました。

＊☒

「滑舌」といえば安倍首相の滑舌は良くありませんなあ。

時々「酒乱的 自衛権」と聞こえることもありますし、「思います」はどう聞いても「オメマス」としか聞き取れませんもの。

「四月」かと思ったら、実は「七月」だったこともあるし、「みんな死んだかい」なんて言われて愕然としたものの、よく考えたら「南シナ海」だったりして…。

耳が遠くなったのかな。